

## セッション「啓蒙と経済学の形成——フランス、イタリア、ドイツの事例」

問題提起 組織者・田中秀夫

昨年は 18 世紀のアイランド、アメリカ、ジュネーヴに関して「啓蒙と経済学」の形成の事例をセッションで取り上げた。今年はフランス、イタリア、ドイツを取り上げる。

18 世紀のヨーロッパは経済学 *Political Economy* という学問が、啓蒙の知の戦略的な役割を担って登場したのではないかという仮説を立て、我々（科学研究費基盤研究 A「啓蒙と経済学の形成—グローバルな視点から」）はその検証、具体的様相の展開を把握すべく研究を推進している。

セッションでまだ取り上げていないのはイングランド、スコットランドと日本における「啓蒙と経済学」の形成である。スコットランドの事例は多くの研究があるが、イングランドに関しては、両者の関係を問題として自覚的に追究している研究は目立たない。イングランド啓蒙の概念が未確立である事情も影響している。日本の場合は、時代が遅れるので、18 世紀の土着の啓蒙の萌芽時代と 19 世紀の西洋思想・学問の導入期を射程において、この主題に迫る必要があるが、それは非常に難しい課題となるので、そうした関連も意識しながら、福沢諭吉を象徴的事例に取り上げて、接近を試みることになるだろう。

18 世紀と 19 世紀の差異は様々にあるが、啓蒙のコスモポリタニズムが、19 世紀のナショナリズムの興隆のなかで、次第に失われていったということが、この主題を考えるときに決定的に大きい。ルネサンス以来培われてきた「学問共和国」は 18 世紀に頂点を極めた後、フランス革命後、国家主義＝ナショナリズムが急速に台頭してくるなかで、解体して行った。貿易の嫉妬は国家利害をかけた総動員戦争になっていく。

18 世紀の知識人はそれぞれの地域への郷土愛をもちながら、外部を敵視する排外主義的な傾向はもたず、コスモポリタニズムを継承していた。インターナショナリズムと言ってもよいが、18 世紀は閉鎖的な民族国家の時代ではなかった。学生は学問の栄える都市に国境を越えて留学するのが当然であった。知識人も国境にとらわれずに移動し、活動した。知識人は国民に語りかけたが、国民は地域的まとまり、単位であって、人種的・民族的実体ではなかった。

18 世紀はこのようにコスモポリタニズムがまだ息づいていた時代であるが、それぞれの地域国家、都市にはそれぞれの独自の文化的伝統と課題があったこともまた事実であり、国情の差異は新しく形成されつつあった経済学にも地域の特徴をもたらさずにはおかなかった。今年度は、こうした視野から、三つの地域における啓蒙のなかでいかなる特徴をもった経済学の形成が進んで行ったか、ボワギルベール、ジェノヴェージ、メーザーを事例として、比較検討する。